る風土がある」と仰います。私は、信ずる風土も大切なことでございますが「感ずる」。心で感じ取って行く、見えないけれども感じ取って行く。「何事のおわしますかは知らねども、ただ忝さに涙こぼるる」という西行法師の歌を思い出させます。「感じる」ということは、実に大切な事だと。我々日本人の宗教観というものは神も仏も宗教観としてしっかりと私達の心の中に宿っている。これを喚起することが、私達の大きな仕事ではなかろうかというように常々思っているわけでございます。

今日は、六十五周年に私のような拙い話を長時間ご清聴賜りましたことを厚く御礼を申し上げまして、これで終わりとさせて頂きます。ありがとうございました。おおきに。

講師紹介

音羽山清水寺

貫主（かんす）　森（もり）清（せい）範（はん）

全国清水寺ネットワーク会議代表
洛陽三十三所観音霊場会会長
文人連盟会長
社会福祉法人衆善会名誉顧問
希望大国いわて文化大使
岩手県奥州市文化大使
東北震災支援『縁』プロジェクト顧問

略歴

昭和十五年　七月八日　清水に生る
昭和三十年　四月　清水寺貫主　大西良慶和上のもと得度　入寺
昭和三十八年三月　花園大学卒業　真福寺住職
昭和六十三年四月　清水寺貫主　北法相宗管長就任
平成二十四年　宝性院住職

著書

「心を活かす」「心に花を咲かそう」「一口説法　心を練る」「心を掴む」「心で観る」「心に響く」DVD（以上　講談社）
「人のこころ観音の心」「命こそ仏さま」「見える命　見えないいのち」（日本ビジネスプラン）
「一文字説法　観音のこころ」（佼成出版社）
「清水寺まんだら」（春秋社）
「水は知的生命体である」（風雲舎　共著）
「こころの水」「こころの幸」（角川マガジンズ）
他

創立六十五周年記念式典

当会創立六十五周年記念式典がリーガロイヤルホテル京都に於いて平成二十九年二月二十三日の佳日に京都府神社庁田中恆清庁長を始め、神社庁関係団体、協賛業者、当会歴代会長、府内関係神社、OB諸先輩、また神道青年全国協議会長友安隆会長を始め全国から神道青年全国協議会役員、各単位会代表をご来賓にお迎えし、二百十余名(当会会員七十三名)が参加の下、開催された。

松大路和弘副会長による開会の辞に始まり、会長式辞では櫻井宣人会長よりお力添えを頂いている関係各位に感謝の意が伝えられた後、この度のテーマである『交』～つむぐこころ～に込められた思いを織り交ぜながら今後一層積極的な活動に取り組む決意が申し述べられ、中川正盛創立六十五周年記念事業実行委員長より記念事業報告がなされた後、田中庁長、長友会長、中小路宗隆当会第十三代会長より夫々、当会、

そして青年神職に対して期待の込められた熱い熱いご祝辞を賜った。会歌合唱の後、京都府神社庁林秀俊副庁長(当会第二十二代会長)先導により聖寿万歳が行われ、最後は中田諭副会長による閉会の辞にて式典は終了となった。

式典終了後は、清水寺貫主・森清範先生を講師にお迎えし『見える命 見えないいのち』と題し記念講演会が開催された。

先生にはこれまでの人生経験を基にユーモア溢れるご講演を賜り、会場は時折、笑い声が溢れ盛り上がりをみせていた。

講演会終了後は同ホテル朱雀の間に会場を移して祝宴が執り行われ、六人部是充副会長による開宴の辞、京都府神社庁田中安比呂副庁長の乾杯のご発声により始められ、終始和やかに祝宴は進行し、宴も酣の頃、二宮正幸当会第二十四代会長のユーモアを交えた挨拶と弥栄三唱がなされた後、岩田康彦監事による閉宴の辞により盛況の内に納められた。

なお記念式典当日の朝、櫻井会長始め役員、六十五周年事業実行委員併せて二十二名が京都府神道青年会創立

の地である平安神宮にて記念奉告参拝（正式参拝）に参列した。

歴代会長会

平成二十九年二月二十二日午後七時より、多数の歴代会長の先輩方ご臨席のもと、リーガロイヤルホテル京都において歴代会長会が開催された。この歴代会長会は五年ごとの周年の記念式典前日に開催する習わしとなっており今回も恒例により開催の運びとなった。

先ず岩田監事（前会長）の開会の辞、櫻井会長挨拶に続き、中川実行委員長より記念事業計画の報告がなされ、次に当会第十七代会長黒木治夫先輩による乾杯のご発声で開宴した。

創立六十五周年の節目に、当会を築いてこられた歴代会長の先輩方から現役時代の様々な素晴らしく楽しい活動や神道青年会に対する熱い思い等を直接お伺いさせていただき、やはりその裏側には並々ならぬご尽力と決断を要されたことを改めて感じた。参加した執行部一同、当会を連綿と受け継がれてこられた歴代会長の先輩方の思いを受け継ぎ、当会の益々の発展のために思いを新たにする大変貴重な機会となった。

（北野天満宮　松大路　和弘）

後列右より
第二十五代　櫻井　宣人（現会長）
第二十七代　飯田　延生　先輩
第二十八代　藤森　長正　先輩
第二十三代　田中　朋清　先輩
第三十一代　本郷　貴弘　先輩
第三十代　中野　忠雄　先輩
第三十二代　稲本　高続　先輩
第三十四代　岩田　康彦（現監事）

前列右より
第二十九代　堀川　宏史　先輩
第二十四代　二宮　正幸　先輩
第十九代　生嶌　經和　先輩
第十六代　中田　幹男　先輩
第十三代　中小路宗隆　先輩
第十四代　出雲路敬直　先輩
第十七代　黒木　治夫　先輩
第二十六代　梶　道嗣　先輩
第二十三代　吉田　武雄　先輩
第二十五代　進藤　秀保　先輩

＊第二十一代　橘　重十九　先輩
＊第二十二代　林　秀　俊　先輩
両先輩にもご出席頂きましたが、ご多用の為、写真撮影が叶いませんでした。
＊第十四代　出雲路　敬直　先輩には平成二十九年四月十六日に帰幽されました。茲に謹んで哀悼の意を表します。

創立六十五周年記念事業 OB大懇親会

平成二十八年度臨時総会の後、「祇園円山かがり火」に於いて恒例のOB懇親会を創立六十五周年記念事業として拡大した「OB大懇親会」が会員六十一名、OB二十四名参加の下、組織委員会・親睦委員会共催にて盛大に開催された。今回は記念事業として京都府外に転出されたOB諸先輩や元会員も対象にご案内したところ岡山県から秋山政徳先輩（元・石清水八幡宮）にも駆け付けて頂いた。

懇親会は、松大路副会長による開会の辞に始まり、櫻井会長挨拶、同日行われた臨時総会において次期会長に選出された六人部副会長挨拶の後、OB諸先輩紹介と続き、乾杯では小栗栖元徳先輩による和やかな挨拶を賜わり会場は一層笑顔が溢れていた。

始めのうちは、OB諸先輩、会員それぞれ個々の場所で奉務神社の近況、青年会での思い出話に華を咲かせる姿が見られたが、親睦委員会による清興（目隠し物あてクイズ）が始まるとOB諸先輩・会員混合の四チームそれぞれが協力しあいながら正解を導く姿がみられ楽しい雰囲気の中、会場一帯となって懇親を深めていた。

清興後も、OB諸先輩と会員は膝を突き合わせ、奉務神社の近況等をお酒等で喉を潤しつつ語り合い、さらに一層懇親を深める時間を過ごした。宴も酣の頃、OB諸先輩一人ひとりから挨拶を賜り、神道青年会や会員に対する叱咤激励のお言葉に会員にとっては今後の活動や奉務神社での奉仕に大変意義深いものとなった。閉会の辞では六人部副会長が務め、六人部節（調）にて抱負を述べられた後、恒例となった六人部締めをもって大盛況の内に納められた。

（大将軍八神社　生嶌　紀之）

創立六十五周年記念事業 皇居勤労奉仕参加報告

平成二十九年三月七日～十日の四日間、渉外委員会の主催にて京都府神道青年会創立六十五周年記念事業「皇居勤労奉仕」が開催され、十五名の会員が参加しました。今回、京都府神道青年会としては六十周年記念事業以来、五年ぶりの開催となりましたが、ほとんどの会員が初めての参加であり、皆が緊張した面持ちで初日を迎えました。

皇居に於いて私たちの集会所でありました「窓明館（そうめいかん）」で初日集った奉仕団は前日からの奉仕団含め十三組で凡そ三百七十名。部屋を埋め尽くす程の人に驚き、また、京都府神道青年会の紹介がなされた際、会場が少しどよめいたことで、神社界に対する世間の関心の高さが伺え、尚一層、背筋が伸びる思いでした。

勤労奉仕団としての一日は毎朝八時半頃より待機所から列を組み、宮内庁職員のご案内を頂きながら皇居内を移動。昼食時間を挟み午前午後と各一時間三十分程のご奉仕でした。

初日は今上陛下がご公務の合間に研究の場として使用される「生物学研究所」周辺の御水田清掃、御桑園（ごそうえん）での草引き並びに肥料撒きでした。御水田は皇居に於いて一カ所で、毎年今上陛下がお手植えをされ、実った稲穂は宮中三殿への御供物になるそうです。御桑園は、皇后陛下の御養蚕に用いる桑となります。自然豊かな環境の中、田舎育ちの私としては恐れながらも何か懐かしい気持ちでご奉仕させて頂きました。

移動の際には、宮中三殿の外周を進み、正門前にて各団長先導で拝礼。奉務神社では毎年春季・秋季と皇霊祭の時に遥拝式をご奉仕しておりますが、驚く程、近くでお参りさせて頂けることが身に余る思いでした。

二日目は宮殿をご案内頂きました。一般参賀の場所として、テレビを通して拝見していた宮殿は予想以上に大きく、石、お庭の植物、隅々に至るまでこだわりがありました。前日に、同じく西地区にある大道庭園（おおみちていえん）で樹齢三八〇年もの「根上り五葉松」や徳川家光公が愛でたといわれる樹齢五〇〇年の五葉松等数々の盆栽を拝見した折に、その様な盆栽が八人がかりで宮殿へ運ばれるとのことで、改めて規模の大きさに感心したのは勿論のこと、主要儀式を行うに相応しい設えに勤労奉仕団からは感嘆の声が上がっていました。その日は宮殿の長和殿前広場での清掃を行いました。少しの塵も残さぬよう心掛け、清掃奉仕をさせて頂きました。

三日目は赤坂御用地でのご奉仕でした。園遊会の行われる庭園を背景に写真撮影をしたのち、そこから程近い大池、中ノ島にてキク科のツワブキという植物を植樹並びに水やりをする作業を致しました。着重ねていた上着を脱ぎ、程よい汗をかきながら作業に没頭致しました。赤坂御用地内の梅園では梅花が咲き誇り私たちを迎えてくれているようにも感じました。

四日目は皇居内東御苑のご案内を頂き、晴天の下、旧本丸地区の清掃を行いました。江戸城の天守閣は明暦三年（一六七五）の大火（振り袖火事）によって残念ながら消失していますが、その土台となる見事な石垣が在りし日の姿を想像させました。

この期間中、三日目には東宮御所・楢の間にて皇太子殿下より、四日目には皇居・蓮池参集所にて天皇皇后両陛下より御会釈を賜り、我々青年神職への期待の御言葉を頂戴致しました。（要旨後載）

四日間のご奉仕を通して、皇居内各所の拝観や清掃など、他では出来ない貴重な体験をさせて頂くと同時に、皇

室に関する見識を一層深めることが出来ました。幸いにして晴天に恵まれた中で季節の移ろいを肌で感じながら勤労奉仕に参加させて頂きましたことは一生の思い出です。

最後となりますが、今回の事業にご理解とご協力を頂きました各奉務神社の宮司様をはじめ職員の皆様、奉仕期間中たいへんお世話になりました宮内庁職員の皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

（賀茂別雷神社　晴山　昇）

天皇陛下・皇后陛下御会釈 要旨

（平成二十九年三月十日十五時三十分～四十分　於 蓮池参集所）

天皇陛下『ご苦労様です。』

皇后陛下『ありがとう。』

櫻井会長「京都府、京都府神道青年会、十四名で参りました。」

天皇陛下『どちらの神社からお越しですか？』

櫻井会長「京都府下十一社から参りました。」

天皇陛下『あなたはどちらの神社にお勤めですか？』

櫻井会長「京都府八幡市にございます、石清水八幡宮です。」

天皇陛下『石清水八幡宮は高地にありますね？』

櫻井会長「標高一四〇メートルの山の上にあります。」

天皇陛下、皇后陛下の方をお向きになられ、

天皇陛下『私たちも昔行ったことがありますね。』

皇后陛下、軽くうなずかれる。

櫻井会長「平成九年に御親拝頂いております。」

天皇陛下『毎日山の上まで登られて奉仕されているのですか？』

櫻井会長「はい。毎朝山の上まで登って奉仕しております。」

天皇陛下『どうぞお元気でお過ごし頂くことを願っております。』

皇后陛下『ありがとう。』

櫻井会長「ありがとうございます。」

皇太子殿下御会釈 要旨

（平成二十九年三月九日十五時三十分～三十五分　於 東宮御所）

皇太子殿下『ご苦労様です』

櫻井会長　「京都府、京都府神道青年会、十四名で参りました。」

皇太子殿下『神道青年会ではどのような活動をされていますか？』

櫻井会長　「京都府内の各神社から青年神職が集まり、子供たちに向けた活動などを行っております。」

皇太子殿下『子供たちにですか。』

櫻井会長　「はい。」

皇太子殿下『みなさまお元気でお過ごし下さい。』

櫻井会長　「ありがとうございます。」

創立六十五周年記念事業 東日本大震災復興支援活動

当会創立六十五周年記念事業「東日本大震災復興支援活動」が平成二十九年五月二十二日から五月二十四日の三日間、櫻井宣人会長を始め、会員十五名参加のもと実施された。

今回の活動内容は、宮城県石巻市に鎮座する作田島船魂稲荷神社の「社殿復興奉告祭斎行」、「現地視察」、「宮城県神道青年協議会との交流会」であり、社殿復興奉告祭は五月二十三日午後一時より現地で斎行された。

所役は、斎主に前神道青年全国協議会役員で同市に鎮座する鳥屋神社禰宜の櫻谷賢一氏、祭員を当会の六人部副会長、林秀明会員が務め、また伶人を杉田潤会員、舞人を河谷真里会員、典儀を松大路副会長が務めた。

祭典後、懇談会として神社世話人の方から東日本大震災当時のことなど壮絶な、また貴重な体験談を拝聴したが、参列した会員は祭典終了後の安堵の気持ちを切り替え、真剣な面持ちで語られる話に耳を傾けていた。懇談会後の現地視察では、京都神青会員にて日和山公園に登り、高台から社殿が復興した中州を眺めるなどし、翌日には、航空自衛隊松島基地、女川町、名取市閖上地区などの復興状況を視察し会員各々が研鑽を積んだ。

約四年前、鳥屋神社・櫻谷祢宜と稲本高続相談役の神青協役員時代のご縁により交わされた会話から始まったこの事業は、その後、平成二十七年五月、二十八年五月の二度に亘る視察、本年四月の社殿ほか寄贈品の輸送を経て、五月二十三日奉告祭を迎えた。

その間、多くの方々にご助言、ご協力を賜り、当会ＯＢ諸先輩、協賛業者の皆様には、総額百九十四万円にものぼる多額のご協賛を戴いた。このことにより当初予定していた以上の、世話人の方々が熱望されていた形に近い支援をすることが出来た。

世話人の方々の、本当に嬉しそうな笑顔、「このお社を守っていきます。」と熱く言っていただいた表情、震災当時の様子を懸命に語っていただいたお姿を忘れず今後も当会に出来ることをしていきたい。

しかし一方で課題もあり、これからの方が大変であろう。

東日本大震災から早六年二ヶ月が経った。少しずつではあるが復興に向かって着実に進んでいるように思われる所もあれば、まだまだこれからの所もあるように感じる。メディアによる情報よりも、現地で実際に見聞きすることで改めて考えさせられることは多い。風化させてはいけない。灯を消してはならない。地元の方々にとって一日でも早くより良い復興、そして発展がなされることを願う。

文末にあたり今一度、この事業に携わって戴いた関係各位に重ねて厚く厚く御礼申し上げます。

（向日神社　六人部　是充）

京都府神道青年会創立六十五周年記念事業
東日本大震災復興支援活動寄贈品・寄贈者一覧

寄贈品	数量	寄贈者
社殿修理	一式	㈲匠弘堂 様
社殿調度品（厚畳、御錠等）	一式	㈲岡本装束店 様
鳥居	一基	㈲長谷川工務店 様
眷属石像	一対	お茶屋まん 上柳満彩美 様
テント	一式	京都東ライオンズクラブ 様
社殿	一棟	京都府神道青年会
覆屋	一棟	京都府神道青年会
太鼓、太鼓台	一式	京都府神道青年会
法被	二十着	京都府神道青年会
テント	一式	京都府神道青年会
社殿、鳥居、眷属輸送費	一式	京都府神道青年会
社殿等設置工事費	一式	京都府神道青年会

京都府神道青年会創立六十五周年記念事業　東日本大震災復興支援活動

作田島船魂稲荷神社　社殿復興奉告祭

一、日　時　平成二十九年五月二十三日（火）　午後一時
一、祭　場　作田島船魂稲荷神社　鎮座地…宮城県石巻市中瀬四―一〇
一、次　第

時刻斎主以下祭員参進　奏楽
是より先手水の儀あり
斎主以下祭員所定の座に著く
先ず修祓
次に斎主一拝
次に神饌を供す　奏楽
次に斎主祝詞を奏す
次に神楽を奏す
次に斎主玉串を奉りて拝礼
次に参列者玉串を奉りて拝礼　奏楽
次に神饌を撤す　奏楽
次に斎主一拝
次に退下　奏楽

一、玉串奉奠者

作田島船魂稲荷神社世話人　佐々木　博　様
京都府神道青年会　会長　櫻井宣人
仝　創立六十五周年記念事業実行委員長　中川正盛
京都東ライオンズクラブ　竹内幸平　様
有限会社匠弘堂（レッドクロス）代表取締役　横川総一郎　様
鳥屋神社宮司　櫻谷隆　様
宮城県神道青年協議会監事　櫻谷靖雄　様

一、祭典奉仕者

斎主　鳥屋神社禰宜　櫻谷賢一
祭員　京都府神道青年会　六人部是充（向日神社）
祭員　京都府神道青年会　林　秀明（石清水八幡宮）
伶人　京都府神道青年会　杉田　潤（安井金比羅宮）
舞人　京都府神道青年会　河谷真里（石清水八幡宮）
典儀　京都府神道青年会　松大路和弘（北野天満宮）

一、参列者　二十四名（奉仕員除く）

世話人　六名
来賓　五名
宮城神青　三名
京都神青　十名

※直会後、世話人の方々に震災当時の様子をお話いただきながら懇談会を開催。
※その後、京都神青会員にて日和山公園から中州および石巻市内の様子を視察。

創立六十五周年記念事業 親睦ボウリング大会

爽やかな陽気から汗ばむ夏へと移りゆく五月三十日、ラウンドワン河原町店にて当会創立六十五周年記念ボウリング大会が親睦委員会主催にて開催された。

本年は当会会員やご家族、巫女（事務員）の方々あわせて六十一名の参加を頂き、櫻井会長の始球式で幕を開けた。ゴールデンウィークからの繁忙期に溜め込んだストレスをピンにぶつける会員、かたや投球の順番を忘れるほど話しに花が咲いている参加者たちは大変楽しげであった。

二ゲームを終えた後は会場を「がんこ三条本店」に移して懇親会が行われた。

櫻井会長の挨拶に続き、中川実行委員長の乾杯の発声で宴は和やかに始まった。続いて頼が赤らむ頃、親睦委員からお待ちかねの結果発表があった。

男子　一位　藤井　一徳君（城南宮）

女子　一位　井上奈々穂さん（平安神宮）

一位の二人には会長からトロフィーが贈呈され、全員でその栄誉を称えた。

男女それぞれ上位三名と、六五周年にちなみ男子六位と女子五位の成績優秀者にも超豪華景品が手渡され、狂喜乱舞の猛者は美酒に酔いしれた。

入れ代わり立ち代わり、お社の枠を超えて親交を深め合った懇親会は、中田副会長の中締めの挨拶でも興奮冷めやらず、六人部副会長による恒例「六人部締め」を以てお開きとなった。

（賀茂御祖神社　田中　明仁）

神職さんといく伊勢参宮

平成二十九年二月二十日、恒例の「神職さんといく伊勢参宮」（京都府神社庁主催、当会共催）が開催され、学生五十一名が参加した。

当会からは松大路・中田両副会長、田中渉外委員長の三名が参加した。

当日は七時三十分から京都駅団体バス乗り場にて受付を開始。神社庁教化委員会の松井氏が受付を担当され、その手伝いをしていると、鼻をかみながらか細い声で「〇〇〇〇です。」と名乗る絵に描いたような真面目タイプの男子、ハンバーガーを頬張りながら話しかけてくるばっちりメイクの女子、人目を気にせず手を繋ぎながらやってくるカップル二組…。勿論きちんとというか、普通に受付を済ませる学生もいたが、そもそも本当にお伊勢さんに興味があるのか、「豚捨」のコロッケにしか興味がないんじゃないのかと疑問を抱かざるを得なかった。

外宮の参拝、昼食をすませ、内宮では宇治橋前からあの「ブラタモリ」（NHK）でタモリさんをご案内された神宮権禰宜 石垣仁久広報課長が大変わかりやすくユーモアたっぷりにご案内してくださった。

神宮の年間参拝者数は約八百六十万人。その数は京都府民の七倍の人数であり、すなわち京都府民全員が一年間に七回訪れる数と同じであること。二十年毎に架け替えを行うが、それほど多くの参拝者が必ず宇治橋を渡るため、二十年間で橋の表面（踏み板）部分が最大十センチメートルもすり減ってしまうこと。また、「五十鈴川」の名前の由来は、古代の日本人にはこの川のせせらぎの音が、「いすす、いすす」と聞こえたことに由来した説と、「い（接頭語）」と「すすぐ（漱ぐ）」という説があるが、「せせらぎの音説」の方が古代の人のロマンに触れられてより適切ではないか、ということ等々神職である我々も大変勉強になった。

内宮では御垣内参拝の後に、古殿地を特別にご案内いただいた。古殿地から荒祭宮に移ろうとしたその瞬間、暖かな一陣の風が我々を包んでいくという出来事が起きた。そこにいる誰もが天照皇大神様の大稜威を共感した瞬間だった。風は太陽の力によって起こると言われている（太陽の熱エネルギーが地球の表面に当たる温度差により風が生まれる）。振り返れば平成二十五年十月の内宮遷御の儀の折、正に遷御される直前の浄闇の中を一度だけ強風が吹き抜け、頭上の木々を揺らし続けていたことが思い出される。

荒祭宮を参拝した後、神楽殿にて御神楽を奉納。日常生活では滅多に正座をしないであろう学生さんたちが、誰一人足をくずすことなく正座し続けていた。あの鼻かみ男子も、ハンバーガー女子も、あのカップル達も誰もが、神域の空気、そして、あの「風」によって西行法師の和歌の境地に至った時間だったに違いない。（コロッケしかと思ってごめんなさい）御神楽を終え、もちろん誰もが足が痺れて立つこと

はできなかったが、一人の女子が「足の痺れを我慢できたからお願いごとが叶う気がするよ～」と口にしていたのを聞き、今後もこの活動は続けていって欲しいと思った。

そして、参拝後に松大路副会長と床机に腰掛けて食べた「豚捨」のコロッケは格別だった。

（賀茂御祖神社　中田　諭）

巫女のための神宮研修会

―『巫女としての仲執持～真の心を次の世代へ～』―開催

伊勢の地に於いて、平成二十九年二月六日から七日にかけての二日間、神道青年全国協議会次世代委員会主催による「巫女のための神宮研修会」が参加者五十七名（巫女五十四名）のもと開催され、京都府内の神社からは四名の巫女が参加した。

全国各地の神社で奉仕する巫女は社頭において日々参拝者と応対する機会は多く、巫女が果たす役割はこれからも益々重要になっていくものであるという考えのもと四年ぶりに開催された本研究会においては、神宮神職による講義や夜間の特別参拝、懇親会などが行われ、全国各地より参加した巫女たちが各々親睦を深めると共に意見交換をする貴重な機会となった。

現在、神職を対象とした研修会は数多くあるが、巫女や事務員等を対象とした研修の機会は各神社に委ねられているというのが実情ではないかと思われ、しかしながら、祭典奉仕を始め、御社頭において参拝者と応対する機会等、実情を見る限りでは、その知識や見識は、奉仕上神職と同等なものを必要とされていると感じる。今後、神職だけではなく、神社で奉仕する巫女や事務員等を対象とした「実地にて本物を感じとり本物を学び得る研修」を、継続性を持ち発展的に実施していく事は大切なことであり必要があると考える次第である。

（向日神社　六人部　是充）